

韓日発掘交流に参加して

6月19日から7月18日まで、韓国の国立慶州文化財研究所と奈良文化財研究所が締結した「発掘調査交流合意書」にもとづき、韓日古代文化遺跡共同発掘調査に参加しました。1ヶ月間におよぶ今回の日程では、日高山瓦窯の発掘調査に3週間参加し、その後1週間かけて奈良県内の主要遺跡および博物館・資料館を見学しました。

日高山瓦窯は藤原宮南面中央の門から約300m南に位置し、藤原宮に瓦を供給するためにつくられた重要な瓦窯です。私が参加した調査では、過去に調査された1～4号窯の詳細な構造が判明するとともに、新たに2基の窯の存在を確認しました。このような調査に参加し、日本の発掘調査方法を学び、遺跡・遺構について深く考える機会を得ることができたことは、とても貴重な経験となりました。また、6月29日と7月31日には、今回の調査に関する記者発表がおこなわれ、韓国での発掘現場の公開方法を考える上でも参考になりました。

日高山瓦窯の発掘調査への参加に加え、奈良県内にある様々な時期の遺跡を直接踏査し、遺跡の調査・研究、復元・整備、活用に関する貴重な知見を得ることができました。

最後に、滞在期間中に調査、踏査、生活など、様々な面でサポートしてくださった奈文研の先生方にとっても感謝しています。しばらくの間、コロナ禍でこのような発掘交流が実施できませんでしたが、今後再び持続的な交流がおこなわれ、両国の調査・研究にプラスになることを期待します。ありがとうございました。（国立慶州文化財研究所 丁 大弘）



日高山瓦窯での調査の様子

8月28日から9月23日までのおよそ1ヶ月、4年振りに再開された日韓共同研究の発掘交流プログラムにより、国立慶州文化財研究所に滞在し、現地での発掘調査に参加しました。

今回、私は慶州市中心部に位置する月城と、東宮・月池の発掘調査に参加しました。月城は新羅の王宮遺跡です。発掘調査は、その中枢部と考えられている丘陵中央部と西南部でおこなわれていました。中央部では現在、統一新羅時代の倉庫群が確認されています。いっぽう、西南部では、三国時代から統一新羅時代の土堤の調査がおこなわれており、土堤の造成に関する地業や祭祀遺構などが確認されていました。土層断面の実測作業を通して、版築状の盛土の様子を詳細に観察することができました。

東宮・月池は統一新羅時代の東宮跡とされ、今回参加した調査区では、大型建物や回廊、礫敷広場などが検出されています。丁寧に加工された基壇外装の石材や礎石、多量の河原石を用いた建物基礎や礎石据付痕跡が良好に残っており、そのスケールの大きさに圧倒されるばかりでした。瓦の整理作業にも参加し、日本の瓦との違いや共通点、分析手法について、研究員の皆さんと議論することができました。

滞在の最終週には研究発表の場を設けていただきました。藤原宮の瓦生産と瓦窯に関するマニアックな報告に対して、多くの方からご意見やご質問をいただけたのもありがたいことでした。

今回は4年振りの発掘交流でしたが、研究所の皆さんに公私ともども暖かく迎え入れていただき、充実した日々を過ごすことができました。今後も、両研究所の交流がますます発展することを願います。（都城発掘調査部 道上 祥武）



実測作業をおこなう筆者（月城西南部の調査区にて）